

**痴呆性高齢者のQOL**  
**- 選択機会設定による痴呆性高齢者の活動性の増加の検討 -**

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
障害・行動分析クラスター

本研究では、痴呆性高齢者 3 名を対象に、統制された選択機会設定のもとで、選択機会を提供すると、本人の選択決定によって、活動性への影響が生じるかどうかを検討することを目的とした。また、同時にこの介入によって対象者の状態、介入実施者の行動に対しても影響を及ぼすことがあるかどうかを検討した。

各対象者への選択機会設定の効果を検討するために、参加者内の反転デザインと参加者間のマルチベースラインデザインを組み合わせたものを適用し、ベースラインフェイズ 1、介入フェイズ 1、ベースラインフェイズ 2、介入フェイズ 2 の順で実施した。独立変数である選択機会設定は介入実施者の選択肢提供時の手続きを統制するためにチェックリストを用いて行い、従属変数は主に対象者の、活動、ネガティブとして捉えられる行動、表情をインターバル記録法によって観察した。また、対象者以外の従属変数としてスタッフの有無とマンツーマン対応の有無を観察した。最後に、デザイン終了後にこの研究の評価を介入実施者によって行った。

その結果、対象者の活動において、選択機会設定の介入を行ったフェイズはベースラインフェイズよりも活動が多くみられたという傾向が得られた。逆にネガティブとして捉えられる行動は、活動の結果と反比例するように、介入フェイズはベースラインフェイズよりもネガティブとして捉えられる行動が少なくなるという傾向が得られた。

さらに介入実施者による本研究に対す評価は、対象者に対する新たな発見があり、自分にとっても重要で今後の援助においても参考になるという結果が得られた。また、対象者に関しても今回の援助は対象者に何らかの変化をもたらし、本人のためになっているという評価を得た。また、介入方法に関しては難しいと評価されたが、普段の援助に取り入れることは可能であるという結果が得られた。

これらのことから 選択機会設定による対象者への影響の検討、介入実施者による本研究への評価に関する検討、今後の研究及び、福祉サービスの課題、を考察した。